

カルメン・アルテロ・カスパーバウアー
グアム解放記念日 79 周年のスピーチ

私たちの島が敵の占領から解放されてから 79 年が経過した今日、それはグアムで暮らす人々にとって恐怖や不安、そして生存の時代だったことを思い出さずにはいられません。

おはようございます、皆さん！ Mauleg na oga'an todos hamyu. こうして皆さんと私の個人的な歴史の一部を共有させていただけることに感謝します。私はカルメン・アルテロ・カスパーバウアー、ファミリアン・アルテロ・ヤン・キタアンです。今日ここにいることは本当に光栄です。

個人的な証言を始める前に、私は戦争の残虐行為や不安、痛みを経験しながらも、心の中には許しと思いやりが大切だと強調したい衝動があることを最初に皆さんと共有させていただければと思います。

1941 年 12 月 8 日の月曜日の早朝、私の姉ティタと私（それぞれ 7 歳と 6 歳）は、天使のように着飾り、香りの良い花びらを詰めたバスケットを持って手をつないでパパと一緒にアガナ大聖堂に向かいました。ママは私たちの 4 人の弟妹の世話をするために家に残りました。

ミサが始まった頃、頭上でブーンという飛行機の音が聞こえたことをはっきりと覚えています。私はそれがパンナムの飛行機だと思い外に出て見たかったのですが、ティタは「ケト！」（静かにして！）と言いました。私はそれでも見たかったのですが、ティタは「ファマトキロ・ヤン・ケト；バスタ・エ・パスコモ！」（じっとして、静かにして！）と言いました。

すると、男の人が司教オラノのもとにやってきて、ミサを途中でやめて話をはじめました。彼らが小声で話している間も飛行機は頭上を飛び続け、その後遠くで大きな爆発音が聞こえたのではないですか！オラノ司教は、日本軍がグアムに侵攻して来たのですぐに家に帰るよう私たちを促しました。

ティタと私は手を繋ぎ泣いてしまいました。パパを見つけることができずとても怖かったのです。やがて私たちは叔母のアナを見つけました。彼女は片手にハイヒールを持って、父親がママと子供たちの世話をするため急いで帰宅したので彼女が私たちを家に連れて帰ると教えてくれました。

私たちは走って家に向かいましたが、飛行機が非常に低く飛んできてみんなが怖がっていました。私たちは家の軒下を走り抜けたのですが、その時、家族が飼っていた大きなカメの上に乗ってしまっていたことを覚えています！飛行機が飛び去った後、アナおばさんは急いで私たちを引っ掴み家に逃げ帰りました。そこでパパとママがすでに弟妹と荷物と共にジトニー（車）に乗っているのを見つけました。叔母のアナが手伝って私たちを車に乗せるとパパは車をスタートさせました。人々は泣き叫び、パパに頼んで車に乗せてくれ

るように頼みました。「アントニオ、お願い、私たちを乗せて！」彼はジトニーが家族でいっぱいと言いましたが、人々は車の横にしがみついていた。それは私たち子供たちを怖がらせました。みんな泣いていました。父は車から彼らを追い払わなければなりませんでした。それから父は私たちをトガアク（現在の NCTAMS）に連れて行き、戦争中はそこで長い間過ごすことになりました。

私たちがそこに住んでいる間、アメリカ兵がジャングルに隠れていたことを知りました。アメリカ海軍の無線技師、ジョージ・トウィードは、多くのチャモロ人に助けられ隠れていました。最終的にトウィードは北にたどり着き、アメリカに信号を送り救出されるまでのほぼ2年間、父は彼の面倒を見ました。

その後パパは私たちをマネンゴンに行かせる必要があると決めましたが、荷車を引っ張る牛を見つけることができませんでした。その時、2人の男が私たちの家に来て、日本軍へ提供するために持っていった全ての食糧の補償を受けるために、私たち家族を本部に連れて行かなければならないとパパに言いました。しかしその時点でアメリカ軍はすでに日本軍を爆撃していたためパパは彼らを信じませんでした。そこでパパは銃と犬で彼らを脅し彼らは去りました。

それから私たちは服、食料、そして持ち運べるものを持ってトウィードが隠れていた洞窟に移動しました。アメリカ軍の爆撃音が上空至る所に聞こえ、私たちはただ祈るしかなく、みんなが死ぬだろうと思いました。従兄弟のヘスースが、アメリカ軍が到着したと叫びました。父は2人のアメリカ兵と会いました。彼らは船に無線で連絡をとり、私たちを安全な場所に連れて行くまでこの地域を爆撃しないように伝えました。

母は兵士の一人に今日は何日かと尋ねました。ジャングルに隠れていたので時間を把握できていなかったのです。彼は8月8日だと言いました。母は笑いながら涙を流し、私を抱きしめながら言いました。「マミー、今日はあなたの誕生日よ。」私たちが私の誕生日に救出されたことをこれからも決して忘れません。

崖を下りていくと、右側には多くのアメリカ兵の死体があったことを覚えています。左側には多くの日本兵が亡くなっていました。中には木に吊るされているものもありました。

アメリカ軍は私たちをアニグアのピゴ墓地に連れて行きました。そこは収容施設であるキャンプ・ブラッドリーでした。アガナの家は完全に破壊されてしまったため戻ることはできませんでした。代わりに敵がいなくなったアガナハイツに移り、それ以来クルーズの親戚の所有地に住むことになりました。

許しと思いやりは理解があつてこそ得られます。真の深い理解を得るためには、まず人間は気まぐれなものであるということを認識する必要があります。常に完璧ではありません。必ずしも共感できるとは限らず、それが常に公平というわけでもありません。

私たちは、自由に選択するか、向こう側で何が待っているかに関係なく、渡らなければならない橋に直面することになります。私は、私たち島の人々が過酷な状況に追いやられ

たのと同じように、敵の兵士たちも同じように追い込まれたと信じています。それについて哲学的なことは語りません。それよりも私の個人的な経験のみを使ってお話しします。

80年以上前の戦争中、このハガツニャ村にある私の家で、ドアがノックされたのを覚えています。母が応対し、すぐにその後、日本海軍の艦長だとわかった男性と英語で話し始めました。彼はハガツニャを歩いていて、ポーチにある絵を見て我が家に立ち寄りしました。彼はそれがヨーロッパからのものだと見抜きました。彼も日本の自分の家で同じような絵を持っていたのです。

会話の中で日本人の艦長は、ニューヨークのコーネル大学を卒業したことを母に話しました。母国日本に帰国後結婚し、その後軍隊に徴兵されたこと。彼と妻との間には2人の子供がいることを語りました。彼はアメリカのことが好きでアメリカと戦いたくなかった。彼と家族は多くのアメリカ人と友達になっていたが、この立場に追い込まれてしまったと言いました。彼には何もできなかったのです。

彼が妻と子供たちの写真を取り出し、母に見せたことを覚えています。彼は感情的にならないよう堪えていましたが、彼の頬から涙が流れるのを見ました。彼は母に、もう妻と子供たちには会えないだろうと思っている、と言いました。

その瞬間や戦争中の他の記憶を決して忘れることはありません。私が妻として母として生活するようになってからも、第二次世界大戦中の私たちの経験についての長い議論は、両親との間で頻繁に行われました。これらの時代を振り返り、最も困難な時期でさえ、私を定義したのは苦勞ではなく、神の助けを得てどのように乗り越えたかであることを思い出すのは非常に重要でした。この事が、私を一生精神的にも靈的にも強く保つことになったからです。

戦争は恐ろしいものです。平和と調和の中で生きるために、私たちは皆、一緒に働き、互いを愛し、理解し、寛容に接する方法を学ぶべきです。私たちは皆神の子供です。どの国や島から来たか、裕福か貧しいか、読み書きができるかできないかに関係なく、私たちは皆、神の子供であり、互いを愛し、助け合う方法を学ぶべきです。

最後に、私は戦争体験を通じて学んだ知恵を共有したいと思います。非常に単純に言えば、憎しみの中で生きるとはあなたを滅ぼすことになるでしょう。愛と平和の中に生きること、それこそが本当の解放です！

私たち皆にとって幸せな解放記念日です！ Dangkulo na Si Yu'us Ma'ase todos hamyu!